

三月一三日(月)

日中は暑かった背広にコートも、二一時だとちょうどいい。もうじきお彼岸だけど、まだまだ三寒四温。今日の暖かさはたまたまだろう。朝から降り続いていた雨は夕方には上がり、傘は広げずに歩けるのもありがたい。

いつもはビルを出たところで分かれる哲郎くんが、今日は珍しく少し後ろを歩いてくる。小柄とは言い難い体格、いつも穏やかな雰囲気纏っているものの、今日は輪をかけて覇気がない。

「今日は外食？」

哲郎くんはゆつくりと顔を上げる。

「外食っていうか、餃子でも買って帰ろうかなと」

「餃子？ 餃子もいいなあ……」

哲郎くんは三ツ茨木駅の方へ歩いて行こうとする。線路を挟んで王将と大阪王将の店舗はあるが、線路をくぐって右手に曲がった春日商店街にも、餃子の美味しい店はある。とぼとぼ歩く背中に声をかけ、素朴な商店街の餃子バルへ連れていく。テイクアウトのメニューをもらう。店内もそれなりに賑わっているらしい。

「へー。ニンニク不使用なんですね」

メニューを見ていたら興味が湧いてきたのか、ちよつと元気が出てきたようだ。狭いなりにどこも手の込んだ飲食店、飲みどころが軒を連ねている商店街の活気にも釣られ、自分もちよつぴり気が大きくなってくる。

「じゃあ、焼餃子と梅しそ餃子にしようかな」

「それを二つずつと、麻婆豆腐、油淋鶏も」

テイクアウト用の窓口でオーダーを伝え、容器やら袋やらの分け方もパッと決める。あとは出来上がりを待って支払いを済ませるだけ。店内で飲みながら待とうにも、今は満席らしく座れない。

大人しく外で夜風に当たりながら、妻に送るLINEメッセージを考える。

「結構食べるんですね。森田さん」

「なに言ってるんの。君の分だよ」

「えっ？」

哲朗くんが何かを言い足そうと口を開いたタイミングで、出来上がりのお呼びがかかる。財布を取り出そうとする彼より先に、パパッと二人分の支払いを済ませてしまう。麻婆豆腐と油淋鶏の入った方を哲朗くんに差し出した。

「いやいや、流石に悪いっすよ」

「若いのに遠慮すんなって。ほら」

半ば押しつける形で彼の手にした。自分が食べる分もしっかり持った。ただ何か言いたそうな哲朗くんに、さっさと移動して店の前を開けようと手で合図する。

「しつかり食べて、社長をサポートしてもらわないと」

「じゃあ、いただきます」

哲朗くんはまだ何か引つかかっているようだったが、多少素直になった足取りで茨木駅の方へ身体を向けた。

「僕はコッチだから」

茨木駅とは反対の、春日商店街の出口を指差した。哲朗くんは、「あ、じゃあ、おやすみなさい」と軽く頭を下げて、駅の方へ曲がって行った。

その背中を見届けていると、ポケットの中でスマホが震える。さつき送ったメッセージに、「了解です」と芽衣からの返事が届いていた。

広くない一方通行を抜けてくる自動車を避け、月曜日の夜から元気な酔客の間を縫って真っ直ぐ帰路を急ぐ。たまに遭遇する人懐っこい黒猫に遭遇したらどうしようか、期待と悩みとを胸に抱いた。

初出 令和三年四月二四日 NNN (旧サイト) にて公開